

《佐々木基一記念文庫公開講演会特集》

佐々木基一記念文庫について

位 藤 邦 生

佐々木基一氏は、本誌に載せられた講演でも触れられているとおり、広島県豊田郡本郷町の出身である。佐々木氏の貴重な蔵書が、広島大学に寄贈されるに至った経緯を、簡単に記しておきたい。

生前の佐々木基一氏と親交のあった本学文学部の好村富士彦教授（現広島大学名誉教授）から、佐々木基一氏の蔵書の受け入れを広島大学で検討してもらえまいか、とのお話があったのは、好村教授のご退官が近づいたころのことであった。これより先、好村教授のお骨折りで、佐々木氏旧蔵の原氏喜関係資料が広島市立中央図書館に寄贈されたことを、私は承知していた。私にお話があったのは、当時私が附属図書館の運営委員を勤めていたためである。私は十分に意義のあることと直感し、関係諸機関との調整を、すぐさま好村教授にお約束した。佐々木基一氏が戦後日本文学の始発となった雑

誌「近代文学」の発起人の一人であり、氏が広島大学の前身の一つ広島高等師範学校の附属中学の出身であることを、何かで読んで知っていたためでもあった。

広島大学は、二十年以上かけての統合移転が漸く完成に近づき、附属図書館も、東図書館、西図書館に統いて中央図書館ができあがって、移転を完了したところであった。今なら中央図書館にも余裕がある、と、私は千載一遇の状況を喜んだ。当時の前田文之館長や原田康夫学長にも事情を報告し、運営委員会でも了承していただいて、以後、私が折衝の任にあたることになった。

その後、好村教授にご同道を願って、杉並区久我山の住宅街にある、ユニークな六角形のお住まいに、佐々木基一（本名永井善次郎）氏夫人永井郁さんをお訪ねした。九十歳の永井夫人は懇話としてお

られ、佐々木氏の蔵書類を一括して引き受けてくれる施設を長年探していた由をお話しになった。私は、一人の文学者が生まれる過程を研究する、何よりの資料として、それらの蔵書を一括して貰い受け、一括して保存する旨を申しあげた。蔵書数はおよそ九千冊とみた。永井夫人からは、それらの蔵書を無償で広島大学に提供する意思が示され、原田学長の意向を前もってうかがっていた私は、運送費等は広島大学で負担するとご返事した。

その後、本質的でないいくつかの問題も生じたりして、蔵書の移動までに思わぬ時間がかかってしまった。しかし、その間も、永井郁夫人の意思はいささかも変わらなかった。また郁夫人の姪にあたる深谷於京さんのご理解とご助力もあって、平成九年、ついに広島大学への寄贈が実現した。同じ年の十二月五日に「佐々木基一記念文庫公開講演会」を、郁夫人、深谷於京さんをお招きして行ったのであった。当日は原田学長から郁夫人に感謝状が贈られ、佐々木氏の著作や原稿、受贈書等の特別展示も催された。

佐々木基一氏の蔵書は、氏の幅広い活動にみあって、現代文学、美学、映画関係書等、いろいろな分野に及んでいる。また、親交のあった石川淳の全集は三種類が揃っており、署名入りの初版本も数多い。安部公房が自費出版した『無名詩集』は猷呈の署名が添えられている。こうした貴重な資料を十分に活用して、今後、佐々木基一研究、戦後日本文学の研究が深められることを期待している。

永井郁夫人、深谷於京さん、森公太氏・南雲道雄氏ほか佐々木氏生前の知友のかたがた、原田学長以下広島大学の教職員諸氏、当時の前田文之館長をはじめとする附属図書館のスタッフの皆さん、広島大学文学部の教職員および大学院生、これらのかたがたの深い理解とご協力がなければ、佐々木基一記念文庫は誕生しなかった。ここからお礼を申し上げます。また、本誌に載せられた素晴らしい講演を快くお引き受けくださった好村富士彦、楨林澁二両先生に、衷心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

——いとう・くにお、本学文学部教授——